

第 36 号の刊行にあたって

学園長 平原 信男

この鯉淵学園教育研究報告は、学園関係者による調査・研究の成果と関連する総説・解説・随想を公表するとともに、学園における教育研究事業の正確な記録を残すことを目的に年一回刊行しています。

第 36 号の掲載論文は、総説 1、報文 3、事例報告 1、解説 1、そして随想 1 の計 7 報となりました。いずれも示唆に富むものであり、敬意をもって読ませていただきました。各氏に感謝申し上げますとともに、編集に当たった野口委員長をはじめとする委員各位にお礼を申し上げます。

高等教育における教師の使命は、高度な専門領域の研究に根差した最新の情報を学生に与えることであると言えます。その意味で、第 36 号に見られる情報は、研究あるいは実践し続けてきた内容の最新を報告いただけたのではないかと思います。

それぞれの論考を読ませていただく途中、私は、自身の学生時代の講義を思い出しました。それは、「社会科教材研究」という講座で、東京大学での研究を経て、地方の大学に赴任して来られた先生が担当でした。わざわざこんな辺鄙な大学に来られた先生だが、どんな話をするのだろうと思いましたが、始まるとすぐに引き込まれてしまいました。

研究者として、実践をくぐらせた事例を論理的に解説し、学習者にどのような理解を求めていくのかということに熱弁するわけです。毎時間精一杯の授業をなされていました。私は、その姿勢と論理の正しさに心地よさを感じたのです。他の学生はどう思っていたのか知る由もないのですが、専門でもない私は、この先生の講義を毎週楽しみにしていました。

なぜこの時、この過去のことを思い浮かべたのだろうと考えてみると、報告いただいた研究と高等教育の「接点」を大切にしたいという思いが生まれたからだと思います。ぜひ研究の一端を今の学生とともに共有し、研究の楽しさ、論理の面白さ、やってみたことによる満足感など、実体験した先生方の思いを学生たちに施したい、そう思ったのでした。

本学園の先生方には、高度な専門性のある高等教育の場で、学生の心に灯をともし存在となっただけだと念じています。